

入選

人を思う大切さ

愛媛県 今治明德中学校 3年 塩田 真幸

「チッ」という舌打ちの音。だいたいそんな音を聞くときは、殺伐としたいやな雰囲気が多い。舌打ちをした人は、イライラが募っているからしてしまう動作だが、聞いた方はドロツとした重たい空気を味わうことになる。特に、された当事者はいたたまれないと思う。

日本人が、民族大移動かと思うぐらい人が動くお盆休みに、僕はこの舌打ちを耳にした。ふだん、通学のにどかな田園地帯を走る電車に乗る僕にとって、座席に座れないのが「満員」の定義だ。ただ、このときの満員は場所が違った。人、人、人しか見えない新大阪駅。ふだんは混雑を避けて、悠々自適なお盆ライフを過ごせていたのだが、今年は事情が重なり、突発的な移動になったおかげで、危機的状況だった。

元来人混みは大の苦手、ホームに入るまでに多大な時間を要していて、僕はげんなりしていた。息も絶え絶えに、頭の中で「絶対乗れん」「空気が薄い」「暑い」等々負の言葉を連々と並べて、絶望感をあらわにしていた。だが、親から「前の子どもたちもがんばっているね。」と言われ、中学生の自分がこれではいかんと奮起した。

いざ新幹線が入ってきたとき、がんばるつもりだった気持ちは粉碎された。よくテレビで、お盆やお正月のラッシュです、と流れている映像が目の前にあるのだ。それでも両親は慣れたもので、“なんとなる”の安売りをし、乗り込んだのもつかの間、僕たちの前にいた家族が離れ離れになっていることに気づいた。その上、もう一人の子どもが親から離れてしまっている。その父親は意を決したように、抱いていた子どもを抱え直し、少しずつ子どもの方へ移動を始めた。

「すみません」「通してもらえませんか」とひたすら低姿勢で、ゆっくり、迷惑にならないようにとがんばっていた。ギューギューの中、いろいろな人が寄ったり、荷物を寄せたりとやさしさを発揮して徐々に近づいていたのだが、ここで舌打ち事件が起きた。

大きなスーツケースを持った女性の向こうにいる子どもを呼びたくて、

「すみません。子どもを通らせてもらえませんか。」

と言ったとき、「チッ」と舌打ちをしたのだ。みんなが固まった中、男性が四苦八苦しながら子どもが通れるくらいのスペースを作ってくれた。父親はなんどもお礼を言い、僕もホッと息を吐いた。男性は疲れているようだったのに、ニコッとほほえんで、重い空気が一瞬で浄化されたように感じた。

帰路の間、悶々と僕は考えた。人がたくさんいると問題が起こりやすくなる。だけど、人は言葉を使えるし、人を慮るとか、やさしさを体現することができる。僕は紳士的にやさしさを体現してくれた男性のようになりたいと思ったし、考える課題をくれた女性に感謝した。

自分の日々の行動を考え直すチャンスをくれたこと、人が人を思う大切さ、すばらしさを改めて感じさせてくれたことにありがとうと言いたい。そして自分のそばにいる人たちが幸せな気持ちで過ごしてもらえるような人間になる努力をしていくことで、これからも成長していきたい。